東南アジア研究　26巻4号　1989年3月

座　談　会

マダガスカルの農耕
——そのマレー的要素について——

以下は文部省科学研究費海外学術調査「マレー型農耕文化の系譜」のうち，昭和61年度分のマダガスカル調査を終えた後，東南アジア研究センターで行なった一種の総括のための座談会の記録である。座談会は昭和62年9月に行われ，出席者は前田成文，古川久雄，田中耕司，加藤剛（以上東南ア研），深澤秀夫（跡見学園短大），高谷好一（東南ア研）の6名であった。司会は加藤が務めた。

（高谷好一）

I　マレー世界

加藤　前田，高谷，田中の3名にマダガスカルを含めたマレー世界について下敷きになるディスカッションをしてほしい。

前田　マダガスカルは，マラヨ・ポリネシア語族であるということもあって，マレー世界の中に我々は入れて考える。マレー世界そのものは，方言差が大きい。マダガスカルの方が言語的には，まとまっている。形質的にはマレー世界は基本的にモンゴロイドと考えられるが，周辺にはオーストラロメラネソイド（プロトマレー）やピグミーも存在する。

文化的にいうと，習慣や禁忌に対する考え，儀礼などマダガスカルとマレー世界とは似ているものが多いが，これらは似ているというだけで，歴史的な証明は存在しない。

例えば，霊質，地霊，祖霊に対する考えもその要素は両者にある。しかし，マレー世界では霊質が，マダガスカルでは祖霊が重要になり，地霊もムラユ的なマレー世界では影が薄くなる。

文化生態的には，マレー世界は川岸，海岸が中心であるのに対し，マダガスカルはより内陸高地を中心に発展した。

高谷　東南アジアのマレー世界は前田さんの言うように，ムラユ的なものだけではない。ジャワやチモールのことをも考えないといけない。それらを考えると，例えば集落位置では東南アジアでも山が重要になる所がある。集団に関しても例えばフローレスなどだと puang tanah 等という祖霊的な要素が重要になってくる。

前田　その通り。東南アジアのマレーは極めて多様であるが，そのうちで最もムラユ的なものの性質を述べると上のようになる。東南アジアも少なくともいくつかに分ける方がよい。

加藤　生態の方で見ると，東南アジアとマダガスカルの関係をどう見るか。

高谷　三つのことを指摘したい。第一はマダガスカル東海岸は島嶼部東南アジアと極めてよく似ているということ。両者とも Köppen の気候区に従うと Af (Tropical Humid, Rainforest type) になる。深い常緑林が卓越する。このことは降雨パタンを見てもわかる。

第二はマダガスカルの西半分はAw(Trop-

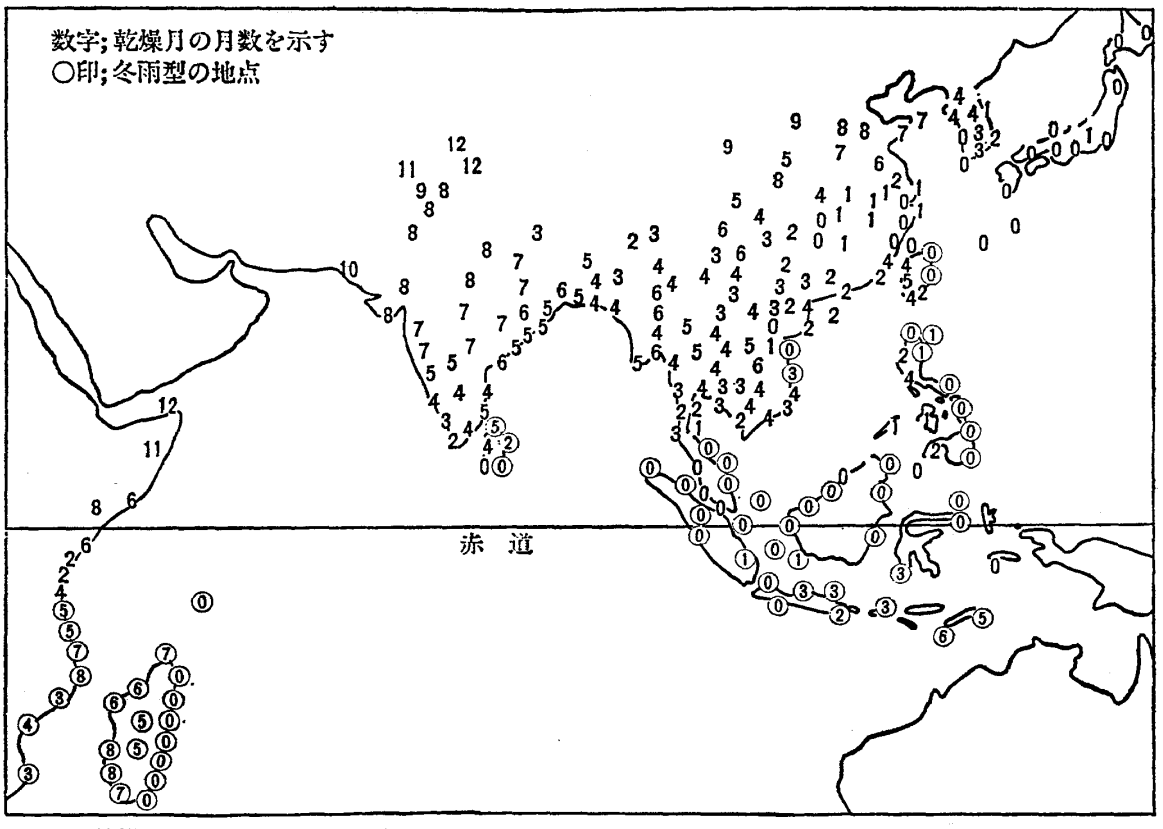


図1　乾燥月の分布。本図は,『アジアの気候』(世界気候誌第一巻)〔倉嶋厚ら 1964, 古今書院〕, ならびに『アフリカの気候』(世界気候誌第二巻)〔土屋巌ら1972, 古今書院〕をもとに作成。

ical Humid, Savanna type) であり，気候的には大陸部東南アジアや Nusa Tenggara に似ている。ただ，植生はこれらとずいぶん違う。マダガスカルは草地であり，東南アジアの Aw は森林地帯だ。マダガスカルの Aw は，むしろアフリカの Aw に似ている。マダガスカルの Aw の今日の草地は人工的なものだがそれはアフリカと似たような生業を持った人の作った植生と考えてよい。植生からいうと，マダガスカルの Aw は非東南アジア的である。

第三は，東南アジアとマダガスカルの交流は沿岸沿いはもちろん可能だが，cross-ocean でも不可能ではない。特に7月，8月に東南アジアからマダガスカルに行くことはそれほど難しいことではない。この時は南赤道海流に乗り，さらに南東貿易風や南東モンスーンの風をつかまえれば，ジャワからマダガスカルへ行くことは比較的容易だ。

前田　マラヨ・ポリネシア語族の東への拡大ということを考えると，マダガスカルへの移住もその時の西への拡散ということで考えてみてはどうか。マダガスカルにあるいわゆるアフリカ的な要素といわれるものは，メラネシア的なものという見方で見てみることも面白いかも知れない。

加藤　田中さん，生業の観点から東南アジアとマダガスカルの関係をどう見るか。

田中　調査出発前に，我々が漠然とイメージしていたマレー型農耕というのは，特に稲作に関わる農業技術要素のセットで，それは，櫂型鋤の利用，家畜による踏耕，穂刈り，高床米倉，足踏み脱穀，様々な農耕儀礼や禁忌等である。こういった要素をひとまず，東南アジア島嶼部の「マレー型稲作」ととらえるなら，マダガスカルの稲作，特に東海岸部

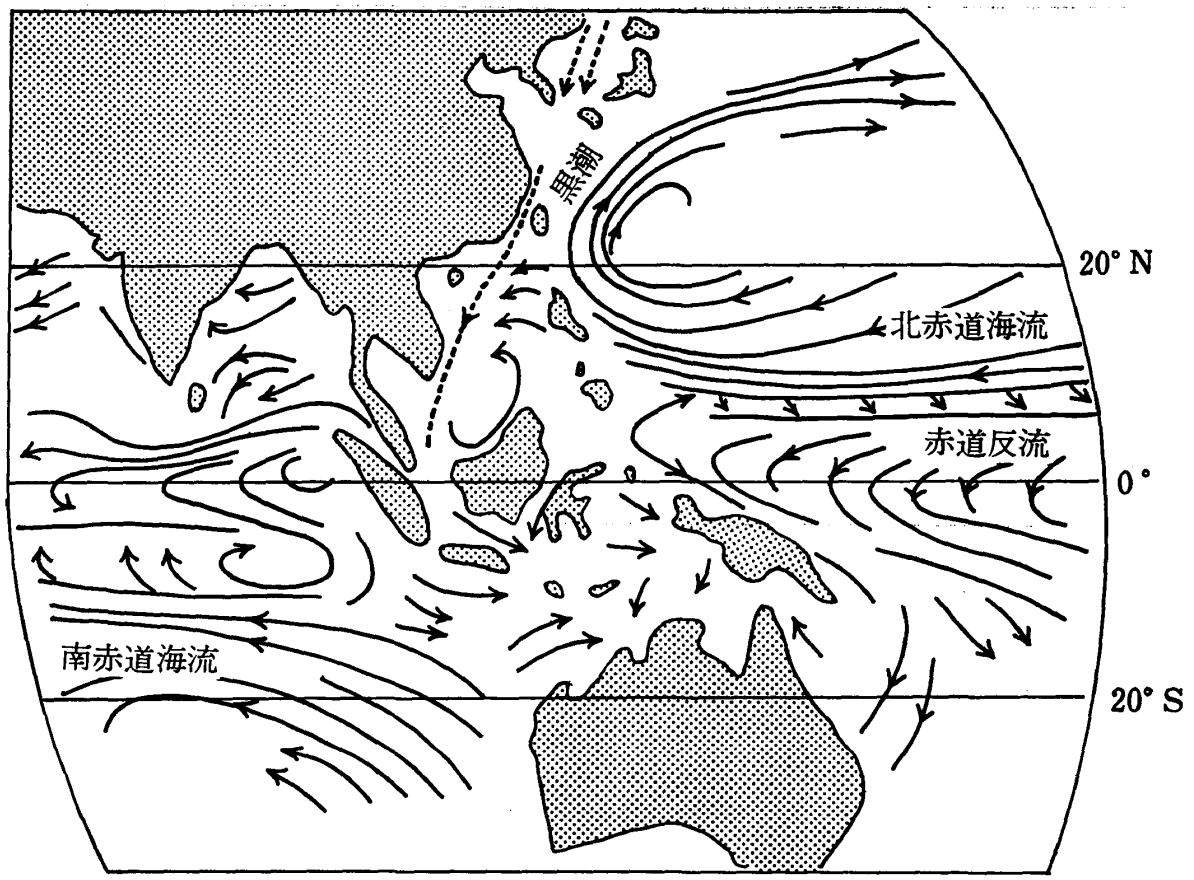


図2　1月の海流。破線は寒流，他は全て暖流。

の Betsimisaraka や Tanala, Antaimoro 等の稲作と東南アジア島嶼部の稲作は共通の要素を強くもっており，マダガスカルの原初的な稲作は，マレー型稲作の一支脈であるということも可能なように思う。

それから，生業一般をもう少し広くとらえると，東南アジア島嶼部の農民は極めて移動性が高い。特に海を介しての移動に歴史的にも余り抵抗感をもたない sea-farers といってもよいような人達が多い。そしてまた，農民自身が森林との関わりを深くもっており，特に森林物産の抽出，交易という面で，外界とも深くつながっている。マダガスカルでは，島内での人の移動はかなりあったようだが，森林と海との関わりがいまひとつ希薄なように思われ，そういった点が東南アジア島嶼部の農民と大きく異なる点ともいえる。

先述したように，稲作の技術要素のなかにはマレー的な要素が多いが，その中で angady をどうみるかは Merina の稲作の歴史と関連して重要である。私自身は，マレー系の人達の最終末期の渡来者（これを Merina と考えたいが）が angady をもちこみ，それがその後，他の民族にも伝わっていったのではないかと思っている。従って，古層に焼畑と谷間湿地のプリミティブなマレー的稲作があり，その上に新たなマレー稲作要素として angady がのっかったというのが，私の推定である。

前田　そこでいわれているマレー型農耕というのは東南アジアではいつ頃形成されたのか。それがわかると，マダガスカルへの到来の時期についても何かいえるかも知れない。

高谷　今のマレーにおける稲作，という意

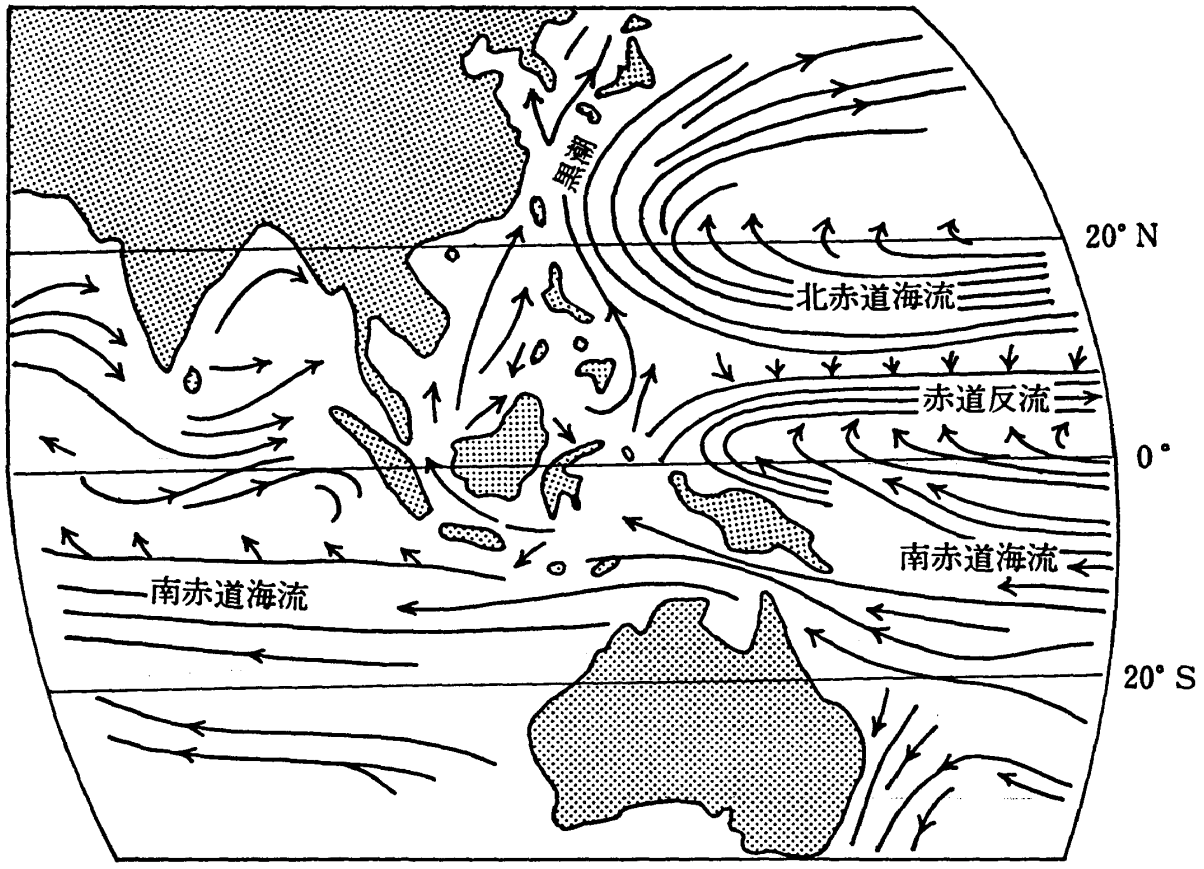


図3　7月の海流

味でなら，焼畑稲作と水稲稲作というように二つに分けて話した方がよい。

田中　焼畑稲作はずっと古く考えてもよい。焼畑稲作といっても，ごく少しの湿地稲作を伴っている。そして，その湿地稲作は踏耕を伴っている。そういう稲作がまずマダガスカルにもたらされ，古層のマダガスカル稲作が特に東海岸を中心に成立したと考えている。確固とした水田稲作はその後の渡来者とともにもたらされたと考える。

古川　焼畑耕作は常畑や水田のエスケープだろう。発生の順序は逆だ。Bezanozano の水田の方が Betsimisaraka の焼畑よりは古いという感じをもつ。

高谷　ジャワなど水稲耕作が早く入るが，それでも水田が始まるのが10世紀頃だろう。広大な地域で行われるようになるのは14世紀頃だろう。

深澤　だいたいそんな年代を見込んでもよい。

田中　Merina は他と比べて水田耕作が特別に確立しているが，この Merina の水田耕作を支えた重要な農具は angady だ。angady は Merina 固有のもので，Merina から周辺地域に広がったと考えている。これは新しい稲作だ。

加藤　マダガスカル専門家としての深澤さんに，上記3名の意見を下敷きにレスポンスしてほしい。

深澤　移住についてだが，不明なことが多い。いつ頃起こりだしたかは不明。言語学の方では，2,000～3,000年前といわれていたが，最近では，古くても1,500年前に始まるのではなかろうかといわれている。^{14}C-dat-

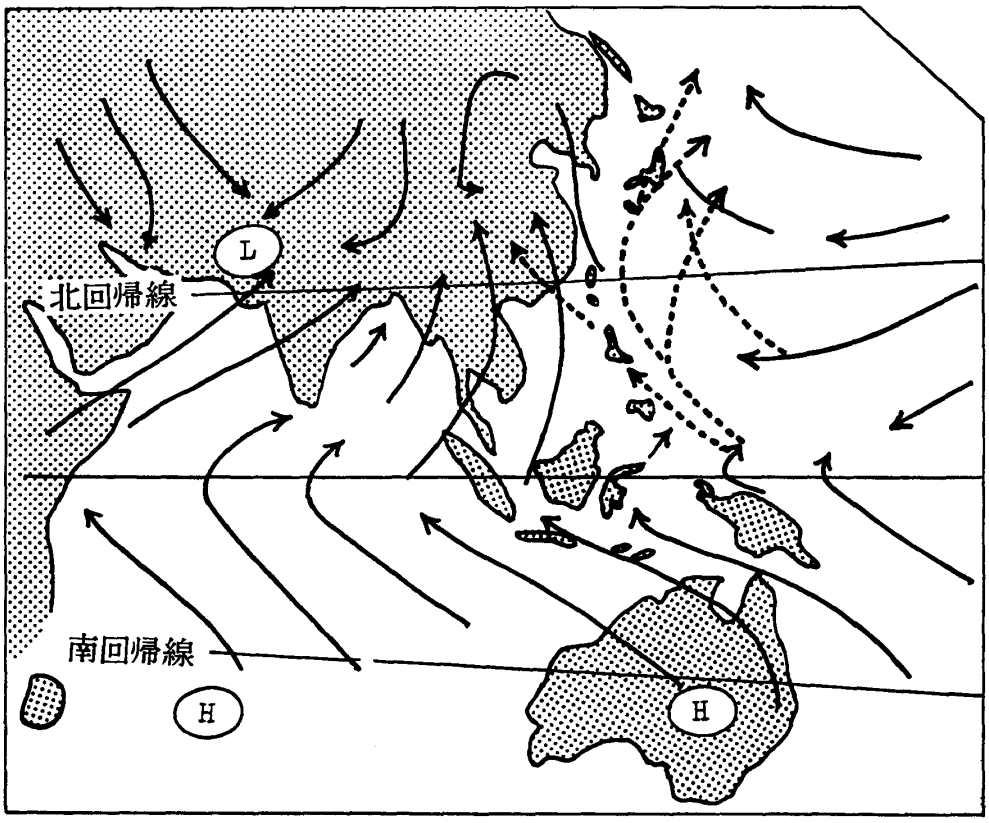


図4　7月の風。破線で示したものは台風。南東貿易風と南西モンスーンが中心。

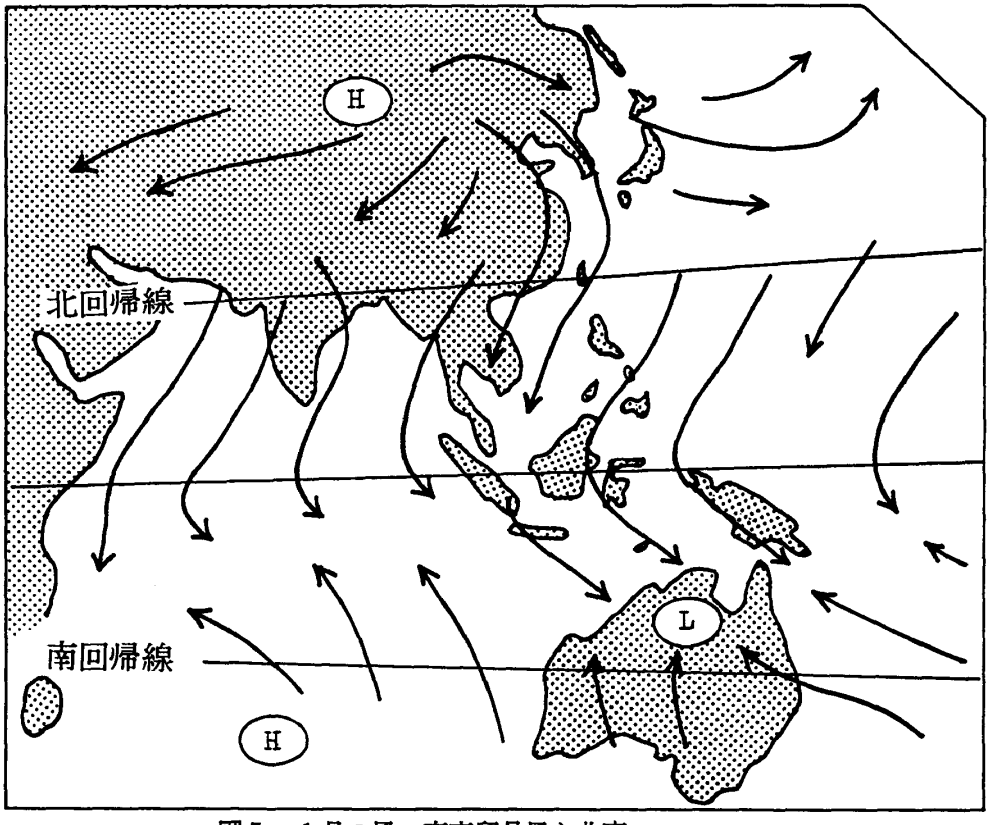


図5　1月の風。南東貿易風と北東モンスーン。

ing でわかる最古の遺跡は9世紀である。最後の移住は14-15世紀ではないかといわれている。

移住の動機，経路，方法も不明。もし沿岸沿いに来たなら，経由地に痕跡がある可能性があるが，今のところない。今のマダガスカル人の多くは遠洋航海の方法を知らない。あるいはパッセンジャーとして来たのかもしれない。ただ，最近では，インドの要素が多いといわれている。いずれにしても，600～800年間にわたり，多重的に移動の波があったと考えておいてよい。

前田さんのいう，東南アジアの diversity に対してマダガスカルの uniformity という問題だが，これは難しい問題だ。言語を除くと，データーでもって uniformity を立証することは必ずしも成功していない。diversity と uniformity の両方を認めておいた方がよい。

前田　glottochronology でゆくと，マダガスカルは1,600-2,000年の幅で一つになると考えてよいか。

深澤　よい。

前田　村落形成という点から見ると，土地は法的基盤と霊的基盤とどちらが強かったか。

深澤　土地の fertility は土地の霊に基づいている。より正確にいうと，祖先に大きく依存している。

前田　自分は前にムラユの典型例を述べたが，東南アジアでも Sulawesi や，一般に東インドネシアでは同様な傾向が見られる。台湾もそういうことがいえる。東南アジアは多様だ。

高谷　将来の議論のために，マダガスカルを分割していただけないか。なるべく簡単な分割にしてほしい。

深澤　基本的には3分割するとよい。Ⅰ，Ⅱ，Ⅲだ。Ⅰの代表は Betsimisaraka，Ⅱの代表は Merina，Ⅲの代表は Sakalava。この他に，多くの中間的な存在がある。例えば，北から行くと，Antankarana はⅠ＋Ⅲ，Bezanozano はⅠ＋Ⅱ，Tanala もⅠ＋Ⅱ，Betsileo はⅡ，Bara, Tandroy, Mahafaly はⅢだ。

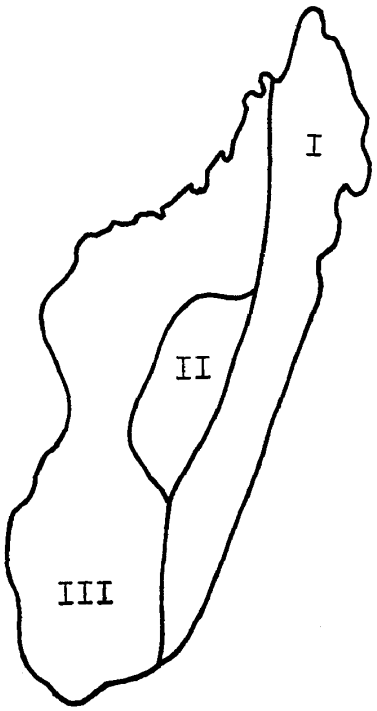


図6　マダガスカルの3地区

加藤　田中さんと前田さんは Betsimisaraka と Sihanaka を，高谷さん，古川さんは Bara や Tandroy, Merina など見ているが，深澤さんの分類でよいと思うか。

田中　Betsimisaraka は森の中での焼畑と谷間の湿地稲作がある。極めてマレー的要素の濃い農業区である。Ⅰ区の代表と考えてよい。Sihanaka はⅠの要素の上に，ⅡとⅢの両方がのっかった地域とみてはどうか。現在では Merina の影響が強く，Ⅰの要素は殆ど見られなくなっているが……。

前田　Sihanaka というのは混合地帯だ。何が元の Sihanaka かというのが問題になる。歴史的に Sakalava や Merina の軍事的侵入を受けており，Betsimisaraka や Be-

zanozano の漸次的なアシミレーションもある。従って，Sihanaka を民族カテゴリーによって分けたりするのは難しい。

調査村は環濠集落の集まりで，谷底の水田と高地の牧畜とからなり，連帯の中心に墓がある。墓は karazana 毎にもっている。一般に Sihanaka は焼畑をせず，焼畑をするのは Betsimisaraka という風にステレオ・タイプ化される。

高谷　Merina などのいる中央高地は，確かにその他の所とは違う。私としては，ここはジャワの火山中腹のように考えたい。そこには水田のあることは事実だが，それよりも畑作地帯としてとらえたい。今多く見られる棚田は畑が最近水田化されたものだ。高地における短期休閑畑地帯という極めて特徴的な土地利用をⅡ区の特徴と考え，深澤さんの区分に賛成。

古川　中央高地と西の平原は古い時代をとれば同じだ。両者ともパストラリストによって占拠されていて，おかげで全面草原になった。しかし，その後の歴史が違う。中央高地には Merina や Betsileo のような農耕民が入って来た。おかげでそこは農地になった。しかし，西平原（Ⅲ）は違う。相変わらずパストラリストが生活している。ここはパストラルな空間だ。

もっとも西の平原にも農業がないことはない。トウモロコシやキャッサバを作っている。稲も作るが，その稲作は極めて特異である。例えば，Bara の行う vary tsipy だと，レベリングをしない緩斜面に谷川から水をひいて来て，その上に多数の牛を追い込み蹄耕をし，そこに稲籾を散播する。こうした稲作は焼畑稲作や湿地稲作とはもちろん違う。私としては，これは Tigris-Euphrates に発し，後に Nilote によって Rift Valley に持ち込まれた，いわば Nilote 系の農耕と考えている。

西の dry zone はその卓越した牧畜といい，この変わった稲作といい，明らかにアフリカ的空間だ。深澤さんの区分には基本的に賛成。

深澤　自分は Tsimihety を調べたが，ここはⅠとⅢの混合地だ。ここでは稲と牛が最も重要なものと考えられている。神と先祖への供儀にもコメと牛は欠かせない。Ⅰの稲とⅢの牛の両要素がここに見られる。既往の研究は稲と牛をバラバラにしてとらえているが，自分としては，Tsimihety を稲，牛の cultural complex としてとらえてみたい。

II　マダガスカルに見るマレー要素

加藤　もしマダガスカル農耕の中にマレー要素があれば，どんなものがあるのか，具体的にチェックして行きたいと思う。農業，牧畜，食事などの側面を中心に検討してほしい。

地域分割

高谷　その前に，ここまでの議論の一応の結論を整理しておいた方がよいと思う。東南アジアにも地区差がある。マダガスカルにもⅠ，Ⅱ，Ⅲというような地区があって，全く違う生態や生業を持っている。混乱を避けるために，地域区分をしておこう。マダガスカルは深澤さんの提唱した区分を採用しよう。東南アジアは高谷［1985］[1] を簡略化して島嶼部東南アジアを多雨林マレーとサバンナマレーに分けたらよいと思う。詳しくいうと，多雨林マレー地区でも，スマトラ高地の Batak や Minangkabau, Sulawesi の Toraja など高地は，多雨林マレーには入らず，別区をなし，その性質はサバンナマレーにむしろ

1）高谷好一．1985．『東南アジアの自然と土地利用』東京：勁草書房．

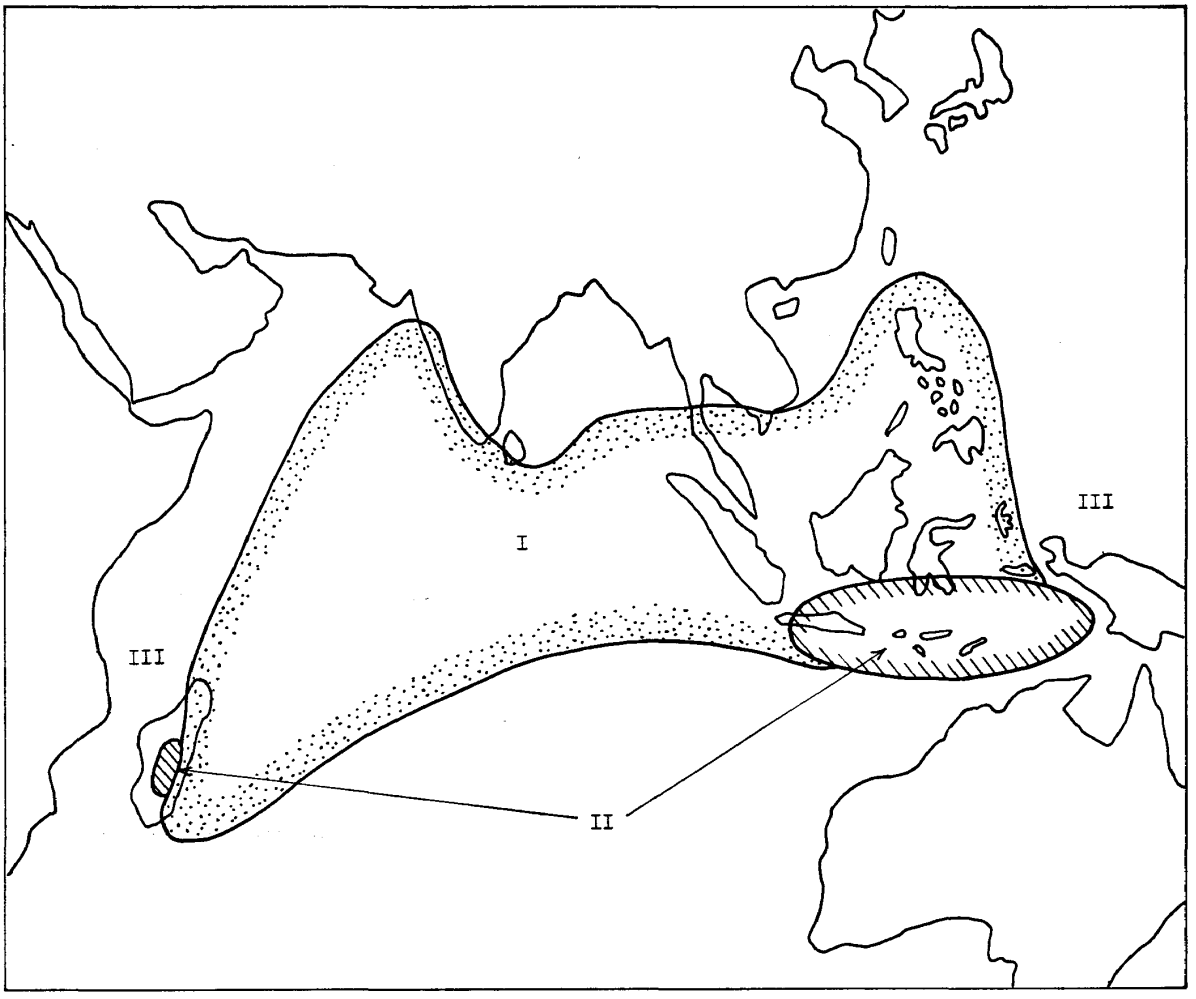


図7　東南アジアとマダガスカルを含めた地域区分

近いと思うのだが，これは省略しよう。とすると，東南アジアとマダガスカルの区分は図7のようにしてみてはどうだろうか。

加藤　多雨林マレーを海マレーと山マレーに分け，次のような対応を考えてよいということか。

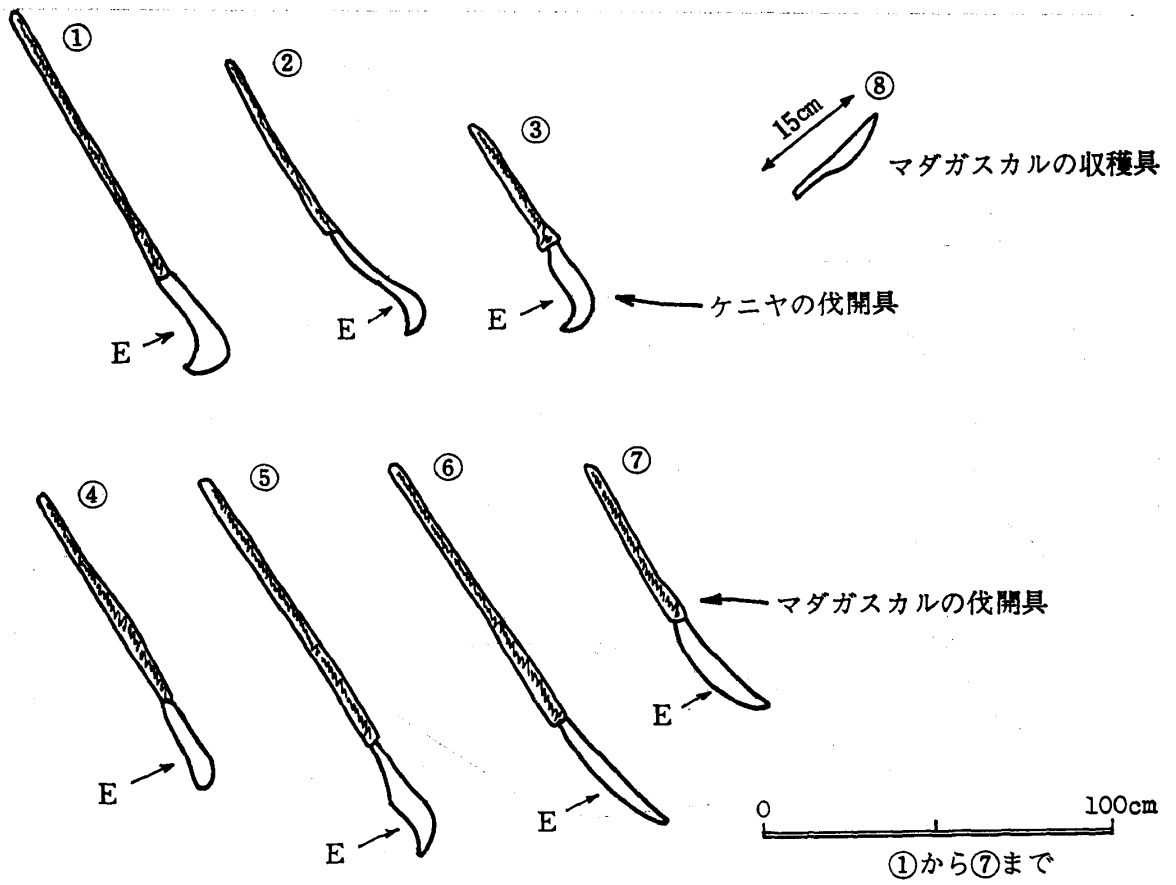
	マダガスカル	東南アジア
Ⅰ（多湿東海岸）	海マレー	多雨林マレー
Ⅱ（中央高地）	山マレー	サバンナマレー
Ⅲ（乾燥西平原）	アフリカ	

高谷　本当はジャワとバリはサバンナマレーの中でもまた別にしたいが，複雑になりすぎるので，一応，一緒にしておこう。

前田　この際，メラネシアもこの図の中に入れて考えた方がよい。

古川　メラネシアはⅢにしたらどうか。マダガスカルの乾燥西平原と同じと考えるのだ。

高谷　方向としてはそういう考えでよいが，いささか危険がある。アフリカのAw地区をⅢとし，マダガスカルのⅢとほぼ同質のものと考えている。しかし，実際にはアフリカのⅢはNiloteとBantuの両方の入ったものだ。アフリカのⅢの性質を今ひとつ明確にしていないので，メラネシアとの対比は危険だ。東南アジアとマダガスカルだけに話を



地点：① Marachi　⑤ Ifanadiana
② Isuka　⑥ Antsi
③ Gusii　⑦ Moramanga
④ Toamasina　⑧ Ifanadiana

図8　ケニヤとマダガスカルの伐開具と収穫具

限ってはどうか。

焼　畑

加藤　農業だが，これを焼畑，常畑，水田と分けて議論してほしい。

高谷　マダガスカルIで行われている焼畑は具体的には海マレーで行われている焼畑と全く同じだ。伐開，火入れ，棒での穿孔，点播，穂刈りが基本作業だ。しかし，用いている道具になるとマダガスカルIと海マレーでは違うものが出て来る。例えば，伐開用具はマダガスカルでは，柄の長いナギナタ形のものだ。これは海マレーの柄の短い parang とも違うし，柄に対して刃の直角についた tajak とも違う。マダガスカルの伐開具は，むしろケニヤの焼畑民の伐開具に酷似している。

穂摘具も同じだ。マダガスカルの穂摘具である karima はナイフである。これまたケニヤで用いられているナイフ型の穂摘具と全く同じ型。マダガスカルの穂摘具は海マレーの用いる ani-ani とは全く違う。結局，マダガスカルI地区の焼畑耕作の基本は海マレーのそれと同じだが，道具にはアフリカの物が入っている。

田中　Befody で用いられている穂摘具も

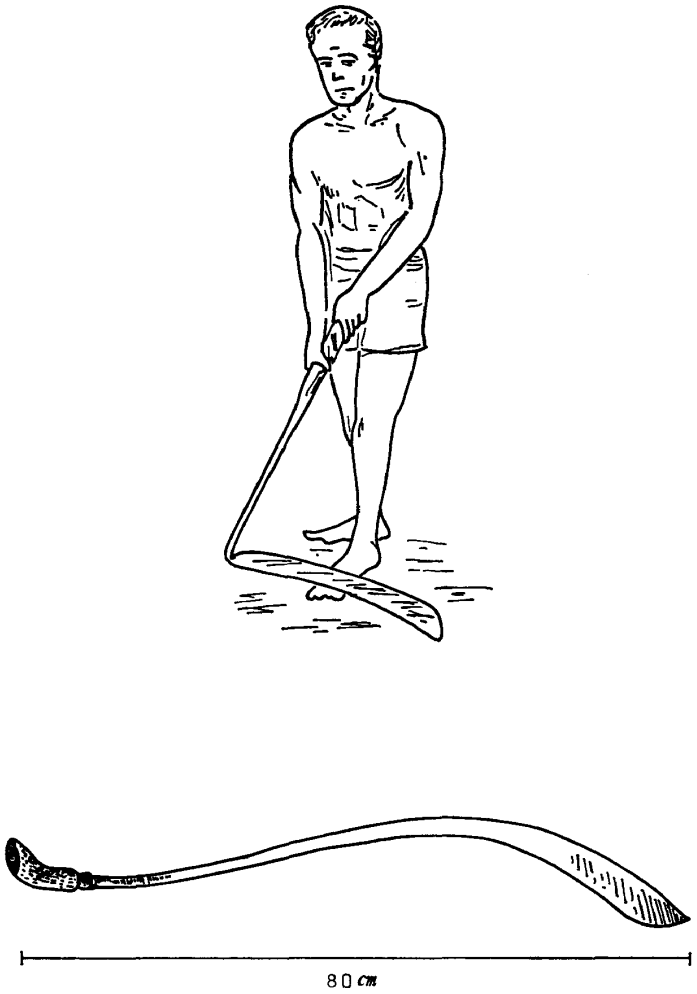


図9　スマトラの tajak（上）と parang（下）

同じようなナイフだ。ただ，注意する必要があるのは，このナイフ型の穂摘具が極めて粗雑に整形された，ナイフの模倣ともいえるもので，比較的新しく使用が始まっている点だ。アフリカとマダガスカルに共通に見られるといっても，アフリカからの伝播，導入と考えるにはもう少し検討が必要だ。

高谷　もっとも，マダガスカルの焼畑の全てが，海マレーと同じではない。特にIの周辺部で見られるものは違う。

古川　深澤さんの調査していた Tsimihety の村で見た焼畑（tavy）の方法も少し違う。草の多く生えている所で，angady で草を削ぎとるように起こし，それをかためて焼いて，その上に angady で孔をあけて籾を入れていた。その時の angady の使い方が，焼畑の穿孔棒の場合と全く違う。angady を軽く土に突き刺し，柄を前に少し動かして，刃と土の間に隙間を作るようにして，そこに播種していた。草地で angady を用いる点，東南アジアの本当の焼畑と違う。

深澤　Tsimihety でも本当の焼畑もある。伐開，火入れして，棒で垂直に孔をあけ，点播している。

高谷　アフリカで焼畑といわれているものは草地での耕作が多い。しかもクワを用いている。一つの代表的な例は，草地にソルガムなどの種子をばら播く。その後に，例のナギナタ様の刃物で草を刈る。そして，それをいくつかの小山に積み，焼く。そして，全体を

その後，軽くクワでひっかいておく。こんなものを2年ぐらい繰り返す。こういう方法は，もう焼畑というのか，短期休閑畑といってよいのかわからない。マダガスカルにも，この種のものが，I区以外の所に時々見られる。

古川　多雨林マレーとマダガスカルの焼畑は酷似しているが，違う点もある。マレーの場合は最近では，焼畑で穀物を作った後，コーヒーやチョウジなど商品作物に変えている。もっとも，これはプランテーション時代以降の傾向だが。

深澤　マダガスカルでも東海岸の北部ではコーヒー，チョウジ，バニラを同じような方法で作る。

田中　品種という点からみると，マダガスカルの東海岸部の稲，特にオカボとして栽培される稲は東南アジアのそれによく似ているのがある。

常　畑

加藤　畑についてはどうか。

田中　高谷さんはMerinaでは畑が目立つというが，私にはそういうようには見えない。Merinaは圧倒的に水田耕作が中心だ。

高谷　今は水田が多い。しかし，現存の棚田の多くは以前は畑だったのではないかと考えている。

田中　作物の組合せなどでもそういうことがいえるか。

高谷　私のいた時期の11月ころにはトウモロコシとインゲンマメの混植が目についた。キャッサバやタロイモもかなりあった。しかし，それより，私が気にしたいのは耕作法だ。angadyでの深耕，penningなどの厩肥利用，休閑システムなどだ。

加藤　本当にpenningがあったのか。

古川　見たではないか。あれはpenningだ。penningと休閑をうまく組み合わせている。

田中　penningはSihanakaでもやっている。Sihanakaはもともと水田地帯で，畑は少ないのだが，その少ない畑に，ある期間動物を囲い込み，それが終わると，そこに畑作物を植えている。こうして，次々と畑を肥やしている。

Angady

田中　angadyはMerinaの物だと自分は考えている。他の人達はMerinaからangadyを受け取ったと考えてよい。しかし，あれは水田耕起具ではないのか。Merinaというのは，鉄刃のついたangadyという，よい農具をもった水稲耕作民と考えるべきではないのか。

古川　angadyは水田用の農具ではないだろう。あれはやはり畑用だ。それから環濠掘削用の工具としても使われたのだろう。水田は湿田だから，足で踏むだけでよい。

高谷　古川さんと私はangadyは土をブロックとして起こすものと考えている。Sulawesiのlinggis等と同じだ。それをしっかりと土に突き立て，ハンドルを手前に強くひいて，土を30 cm角ぐらいのブロックにして，ひっくりかえす。理想的には，そのブロックは天地返しになるようにして，草のついた表面を完全に地中において，草を埋め殺す。

古川　angadyで掘り起こしたブロックは砕土しない。そのままの上に種子を散播しておくと，やがて，雨がきて，土塊は崩れ，種子もうまく土中に入って，立派な畑になる。

高谷　結局，我々はangadyは乾いた土の深耕用と考えている。この畑の深耕用具というのは汎熱帯高地的に分布する可能性がある。例えば，インカの主要耕作具はこれに類したものだった。ただ，インカのものは踏み鋤だ。

古川　angady はフィリピンの Ifugao あたりにある櫂型鋤によく似ている。名前も kahud とか gaud とかいう。サツマイモの畝立てもこれで行う。

高谷　確かに，angady はその形態といい，握り方といい，一番よく似ているのは，フィリピン高地にかけて分布する，いわゆる linggis 系の掘り棒だ。

田中　畑で何を作っていたと考えるのか。

高谷　それがわからない。調査中も，それが一番気がかりで何度も聞いた。だがわからない。ただ，地形から考えると，どうしても現存する多くの棚田は，元は畑だったと考えざるを得ないような分布と形をしている。

加藤　具体的にはどういうことか。

高谷　もし最初から水田として開くなら，谷の下の方から開田して，谷を順次，上に上るようにして田を広げて行く。ところが，Merina や Betsileo のそれは逆だ。尾根筋から棚田が下に広がっている。あれは，もともとは，尾根筋から畑として，下方に広がったものが，どこかの時点で灌漑水の導入を受けて，水田化したのだ。

田中　その見解には，同意できない。現在も棚田は下から上へ上って開かれている。畑の重要性を強調するのに，谷筋の湿地稲作が後発するかのような説明は納得できかねる。Merina や Betsileo についても，私自身は湿地稲作を当初からもっており，同時に山腹をトラバースする水路技術ももっていたが故に，棚田耕作もなしえたと解釈したい。

水田耕作

加藤　水田耕作に移りたいが，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲと地区別に話してほしい。

田中　Ⅰでは先にも述べたように圧倒的に焼畑が多い。しかし，谷間の湿地には水田もある。そこでは今蹄耕を行なっているが，それがもともとあった蹄耕なのか，Sihanaka あたりから導入された技術なのかどうかはわからない。

Sihanaka で見ると，水稲耕作の原型は，蹄耕，直播であったと思う。それが最近，蹄耕で移植する方法に変わりつつある。もともとの Sihanaka の稲作はわからないが，蹄耕をして，その上に数粒ずつの籾をある間隔をあけて置いてゆく，いわゆる湿田点播が行われていた可能性もあったのではないかと考えている。

高谷　その湿田点播というのが本当にあったのか。

田中　いやそれは見ていない。湿田という環境から考えて，そうであった可能性が高い，と考えている。

古川　田中さんは蹄耕はマレーから導入されたと考えているらしいが，それには疑義がある。

蹄　耕

加藤　古川さん。それでは Bara のケースから蹄耕についての意見を言ってください。

古川　Bara の例は，論文中で詳しく述べるから繰り返さない。要するに傾斜したままの田面に灌漑水を入れ，そこに何百頭という牛を追い入れて蹄耕させ，その上に籾を散播し，もう一度踏ませる。これはメソポタミアに起源した技術であると考えている。Ur 第三王朝ではすでにこの技術は確立している。前3,000年紀だ。

田中　何を作っているのだ。

古川　メソポタミアではムギを作っている。

前田　前3000年紀のメソポタミアというと今日のマダガスカルとは時間的にも空間的にも離れすぎている。

田中　常識的に考えて，やっぱり蹄耕はマレーから来たとするべきではないか。一歩譲ったとしても，スリランカかケララからだ。

あのあたりには今も存在するし，あそこからならマダガスカルには来やすい。結局，たとえ，前3000年紀にメソポタミアに発したとしても，それは，ずっと大昔にスリランカやケララに到着していて，元の故地ではもう無くなってしまった後に，改めて，第二のセンターであるスリランカあたりから来たということになる。そうなれば，これはもう東方からの伝来と考えてもよい。

古川　それでも元はメソポタミアだ。

田中　それとも古川さんは，メソポタミアから，四方八方に蹄耕は分散したのだが，マダガスカル，スリランカ，東南アジアのみで現在まで生き残り，後は消え去ったというのか。そういう考えも可能ではあるが。

古川　その通りだ。

高谷　Bara の蹄耕は東南アジアのものとははっきり違う点が一つある。それは籾の播種後，もう一度踏ませるということだ。こうして踏ませて，種子を土中に食い入らせる。これは東南アジアには全く無い方法で，Ur 期のメソポタミアにはあったし，その後，ずっと最近まで，エジプトあたりでは行われてきている方法である。

田中　播種した種子をその後，羊などに踏ませる方法のあることは知っている。インドの畑作などでもこの作業が行われている。しかし，Bara の方法は，マレー系の蹄耕技術が，牧畜を主な生業とする民に受け入れられたことによって変容したものと，考えた方が素直なように思う。

そもそもマダガスカルにあまり古い技術が長く存続してきたと考えるのは無理である。マダガスカルも日本と同じで，文明の中心からは遠く離れた辺境で，文化はずっと後になってから，やって来る吹きだまりだ。蹄耕のような技術だって，仮りにマレーからでないとしても，南インド，スリランカのような第二次センターで一度温存されたものが，後になって到来したと考えるのが自然な考え方だ。

高谷　でも omby という言葉自体はスワヒリ語系で，インドからではなく，アフリカ東海岸の言葉だ。

前田　それは牛はマダガスカルにいたということだ。マレー人達が牛まで持ってきたのではない。ただ，到来したマレー人達は，すでに蹄耕の知識は持っていた。だから，ここに来て牛がいるのを見つけて，すぐに蹄耕を始めた。一応，そう解釈しておけばどうか。

古川　稲作と結びつけて考えようとするから蹄耕の本質を見誤るのだ。それは本来，牧畜と穀作の結合形態であって，作物はコメでもムギでも雑穀でもよい。その技術はメソポタミアに発して，circum-equator に広く分布したものなのだ。牧畜民景観のマダガスカルと，焼畑民景観のマレーを比べると，マダガスカルでの蹄耕が古いと考えるのが当然だ。雑穀で蹄耕やっていたのだろう。

Vary Tsipy

高谷　蹄耕もさることながら，Bara の稲作のもっと大きな特徴は傾斜した畑に灌漑して，そこを踏ませているということではないか。

田中　本当に畦なしの傾斜畑か。

古川　傾斜はかなり強い。その斜面を這うように水路が伸びてきていて，その水路に作られた無数の水口から水が斜面全体に，ばら撒かれている。水路から出た水は斜面を，sheet flow を作って流下してゆく。

深澤　Tsimihety にも同じようなものがある。

古川　Tsimihety でも播種後牛に踏ませているか。

深澤　それはないが，明らかな傾斜上に畦なしで，水を掛け流しにし，稲を作っている。図の如きものだ。ここでは傾斜田(A)がよい田と考えられている。下方にある平坦田

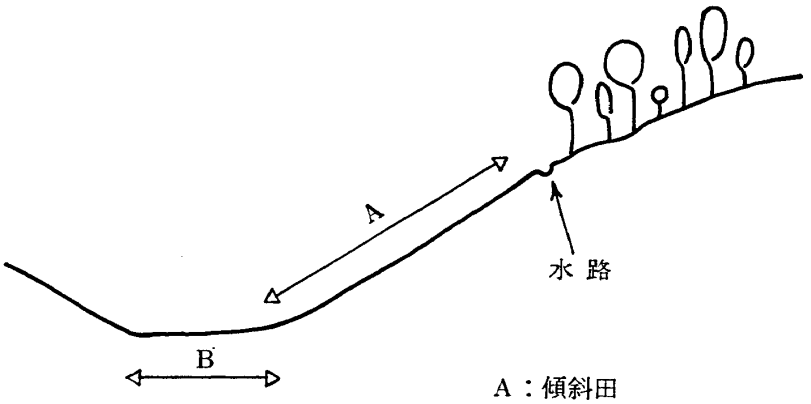


図10　Tsimihety の水田の断面図

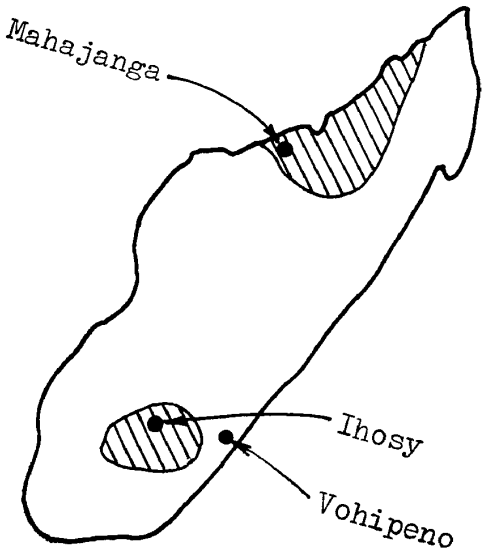


図11　vary tsipy の分布

(B)はあまり上等でない田だ。Aでは良質の白いコメが作られるが，Bでは赤米が主として作られる。

古川　どちらが古いのか。

深澤　どちらが古いかは不明。ただし，人々はAをよりよい田で重要な田と考えている。

田中　よい田ということと，古いということは関係がない。どちらの水田がより本来のものかはわからない。

深澤　上のような傾斜掛け流し田は Mahajanga より北に割合広い。図のような分布域をもっている。

古川　Bara の分布は図のようなものだ。ここで面白いのは，こうした分布域の中で核心域をなすものが Ivohibe という所だ。Ihosy の東の方にある。

前田　核心域とはどういうことか。

古川　今日，きわめて集中して見られる所という意味だ。このことは大変重要だ。ここは山脈を越して，東海岸に出ると，ちょうど Vohipeno に当たる。ここは御存知の通り，多くのモスレムが到来した所だ。モスレムはそこから山に入って，西の乾燥平原に入って来るのだが，その彼らが，常に通過した所，そこがこの Ivohibe で，ここが vary tsipy の中心になっている。これは非常に示唆的なことだ。

田中　いくらモスレムが来たといっても，メソポタミア時代とは時代が違いすぎる。

古川　本質的な技術の息の長さは想像を絶するものだ。

高谷　メソポタミアとマダガスカルの間で両者の接続を証拠立てる資料が全く無いというわけではない。傾斜灌漑畑というものは Rift Valley 沿いに，ケニヤからタンザニアまでは入っている。我々が見たのは Victoria

湖の北東の Kitale という所のものだ。斜面の畑に水路をもってきて，その頂上から水を掛け流している。畦が少しあった。

前田　ムギを作っているのか。

高谷　トウモロコシが主で，他に少しソルガムとシコクビエを作っていた。

前田　Tsimihety と Bara の間の空白地帯はどうなっているのか。vary tsipy はないのか。

高谷　私自身は昔はかなりあったと考えている。ただ最近は畦が作られ，均平化され，普通の水田になった。Masikoro 地区など稲田が多いが，今では多く，灌漑移植田になっている。これは最近の変貌だ。

前田　vary tsipy では昔から稲が中心なのか。

高谷　違うだろう。ソルガムなどあったのではないか。

古川　Masikoro 地区ではソルガムの他にもう3種別の雑穀があったことを聞いている。ただそれらが何なのかはわからない。もう無くなっているらしい。我々が見たのはソルガムだけだった。

高谷　vary tsipy では多分以前は雑穀が作られていた。ちょうど Mt. Elgon の場合のように。しかし，マダガスカルでは，いつか稲がその中に取り入れられた。稲が雑穀の一種類のように雑穀的な方法で作られるようになった。

前田　話を聞いていると，どうも Nilote 系の影響ばかりが強調されているが，もっと南の方からの影響はないのか。例えばザンビアの方面からの。

古川　雑穀はあまり南にはない。主なものは西アフリカのソルガムやシコクビエ，ナイル川沿いのムギ，エチオピアのテフぐらいのものだ。Congo basin 周辺の Bantsu の yam culture が，マダガスカルとどう関わっているかはわからない。

Merina の水田

加藤　Merina の水稲耕作はどうなっているのか。

高谷　Merina も蹄耕をやっていたのか。

深澤　あった。19世紀の初めに王が蹄耕を禁止するというおふれを出している。牛が畦を崩すからだ。

加藤　移植はどうか。

深澤　古記録に現れるものはすべて移植である。Merina は古くから移植が中心であったと考えてよい。

田中　Merina でも Manjaka より東へ行くと散播をしているのもいる。あれはどう考えるのか。

深澤　移植は実際には手間がいって大変だ。手間の無かった人が簡便法として散播にしたと考えてよい。

高谷　Bezanozano は Merina の影響が強いと思うが，あれの方法が蹄耕—散播，そして，田中に排水用の溝など切っている。全体の様子はスリランカの稲作に酷似している。あれはどう解釈するか。

古川　Bezanozano は水田耕作法のみでなく，家の造り方，それから人の顔まで，スリランカに極めてよく似ている。今のところ解釈は何らなしえないが，充分留意しておく必要がある。

前田　Abe [1984][2] p. 62, p. 65 によると sakamaina という地目は谷間より 2～5 m の高さにあり，vary vakiambiaty を植えるという。

古川　Betsileo にはそれに類似したものがある。vary ketsa がそれだ。もっともこれだけだと移植という意味にすぎないが，傾斜畑に水を流して移植している点が面白い。我々が見たのは Ambalavao と Ihosy の間

2) Abe, Yoshio. 1984. *Le riz et la riziculture à Madagascar*. Paris: Editions du Centre National de la Recherche Scientifique.

の国道沿いで，Betsileo の最南端になる。そこでは傾斜畑に水を流してそこへ移植していた。vary tsipy の移植版だ。

高谷　Abe の記事といい，今の古川さんのvary ketsa といい面白い。これは私のいう Merina や Betsileo は最初畑作をしていて，それを棚田に変えていったのだ，ということと直接関係している。畑作民 Merina の水稲民化ということは，この vary tsipy を間に入れるとうまく理解できるかもしれない。

牧　畜

加藤　牧畜に話を進めよう。

古川　マダガスカルの牧畜は一口でいうとアフリカ的だ。

深澤　むしろマレー的ではないか。私は稲・牛コンプレックスを考えていて，それはマレー的カルチャーと考えている。牛は非常に重要なものと考えられている。例えば，米泥棒と牛泥棒はそれを見つけた時殺してもよいことになっている。第二は牛は神聖な獣だ。先祖へ捧げ物をするときも神聖な牛を捧げる。第三に牛は重要な役牛である。蹄耕に使われるだけでなく，荷車を曳いたりする。これらは全て，極めて東南アジア的なことがらだ。アフリカとはだいぶ違う。アフリカでは牛は荷車など曳いたりしない。マダガスカルではどんな小さな村へ入っても牛車がある。

高谷　いまいわれたことは全部事実なんだと思うけれど，だからといって，それを東南アジア的というふうにはいえないのではないか。東南アジアの場合よりも，マダガスカルの方が牛利用はもっと実生活に密着している。

古川　マレーは森林産物抽出者というのが私のイメージで，草原の牧畜民とは全く結びつかない。マレーに入った外来のものとマレーの本来的なものを混同しているのじゃないか。

加藤　牛そのものはアフリカから来た牛ではないのか。

深澤　omby という言葉はスワヒリ語だ。牛もアフリカ系の牛だ。しかし，古い Merina の言葉には jamoka というのがある。Merina の用いた言葉だ。ペルシャ古語に関係があるはずだ。

高谷　動物の面でもⅠ，Ⅱ，Ⅲの3地区ではそれぞれ同質ではないのではないか。例えば，中央高地のⅡでは牛はあまり多くいない。しかし，舎飼いして，厩肥は畑に入れる。Rakotomalala 氏（共同研究者）は Merina などは牛は売って金を儲けるためにかなり集約的に飼っていると言う。西の平原だと，一人で大変多くの数をもち放牧している。多くいるけれど，飼い方は粗放で，また販売を目的とはしない，と言っていた。

加藤　古川さん，Bara の牛の様子を少し話して下さい。

古川　Bara が牛を飼う目的は肉を売るとか牛乳を搾るとかではない。牛を飼うことが生業なのだと言っている。これは Tandroy や Mahafaly も同じで，自分達は牛飼いであり，農民よりも偉い職業だと思っている。この点は Merina や Betsileo と全く違う点で，Merina, Betsileo は蹄耕とか penning とか，農業を中心において考えている。

飼養形態だが，何千頭もの牛持ちがいて，完全な放牧である。野生形態で牛が勝手にお産をして仔牛を育てる。人間は何もしない。ただ草地の更新だけ行う。短茎禾本科草原に放牧していて，草が古くなると，堅くなって牛が食わなくなる。それに草を食おうとする牛の目を突く。だから牛持ちは毎年草原に火入れをして新しく軟らかい草を生やすことだけは怠らない。火入れは乾季の終わりに行う。火は一日に数十 km の草原を走り，雨季に入ると草の新緑が広大な面積を覆う。こう

いう火入れを行うので牧畜地域は一面の草原になってしまう。Ⅱ，Ⅲ地域が何百kmも続く草原なのはそのせいである。これは焼畑民の景観ではなく，牧畜民の景観なのだ。Merina や Betsileo が中央高原に来たとき，そこは林など全く消失してしまった草原だったにちがいない。そうだからこそ，王様の家が木造家屋であることに権勢の象徴としての意味があるのだ。草原は東岸の一部にも及んでいる。こう見てくると，マダガスカルは殆どの地域が牧畜民によって作られた景観だ。ケニヤと同じだ。

こうした牧畜民は Cushitic や Nilote と関係が深いと想定している。これらは農耕を知っている牧畜民で，Cushitic はエチオピアから，Nilote はナイル川流域から南下して，Cushitic は紀元前にすでにケニヤのインド洋岸地域まで達していた。Nilote は少し遅れる。いずれも紀元前後にマダガスカルへ到着していたと思う。

深澤　東海岸へ行くと森が多くて，牛はあまりいない。東海岸と西海岸では様子はだいぶ違う。

高谷　私には Bara の王様を訪れた時の印象は強烈だ。広い草原に100頭ぐらいの牛の群と，白い着物を着て槍を持った男が一人で番をしていた。そんな風景を何ヵ所も見た。その後，ケニヤで Masai の放牧風景を見たが，全く同じだ。私もⅢの乾燥平原の牧畜は極めてアフリカ的と見ている。

深澤　私は南西部のあのあたりは知らない。あそこはしかし，マダガスカル全体で見ると後発地域で，14世紀に歴史が始まった特別な所だ。

古川　南西部だけでなく，マダガスカルの Aw という地域は広くその全域が草に覆われている。それはかつてこの全域が Bara や Mahafaly のような牧畜民に利用されていた証拠だ。この草で覆われた Aw の景観はアフリカの Aw と相似だ。木で覆われている東南アジアの Aw との違いを認識する必要がある。

森林産物

加藤　両方とも熱帯多雨林があるのだが，森林産物という意味ではどうか。

高谷　マダガスカルには香料がないというのが大きな特徴のように思われる。incence も spice もない。

田中　マダガスカルでは確かに料理にも香料が全く入っていない。マダガスカルの料理は概して極めてまずい。

古川　香料から始まって，最近のプランテーション作物まで考えてみても，森林利用は，マダガスカルでは極めて低調だ。これは，この島が外部との接触が少ないということに理由しているのか。

前田　それに森林自体の貧弱さということもある。マダガスカルの熱帯多雨林は東南アジアのそれに比べると樹種も少ないのではないか。

高谷　ここでの森林産物採取で目立つものといえば薬草採りだけではないか。腹薬と媚薬が多く採られるのではないか。Tandroy は専門的な知識を持つ生薬採取家だと聞いた。

深澤　媚薬といえば Sihanaka がマダガスカルで第一だ。

前田　媚薬は東南アジアでも昔は大変重要だった。今はこういうものはすたれたが。この手のものは汎世界的なことではないか。

高谷　それにひきかえ，いわゆる香料は欠落している。

深澤　そうではない。焚香はある。joro の時燃やす。たとえば，牛の供犠を行うとき，まず牛に水をかけ，それから香を焚いた香炉をその牛の上にかざす。joro をやっていると，見なくてもすぐわかる。香りがただよっ

てくるから。

前田　Sihanaka の自分の村では聞けなかった。あるはずだと思って，ずいぶん注意して聞いたが出てこなかった。何を用いるのか。

深澤　木の名前は知らない。だけど樹脂や幹や実を用いる。

高谷　東南アジアでは1,500年以上の昔から香料は重要な産物だが，あれは東南アジアのものといってよいのか。

古川　違う。あれはエジプトに始まっている。ミイラを処理するときに使ったのだ。神様と話をする時にも焚いた。エジプトは最初ソマリヤなどで採っていたが，やがて東南アジアにも遠征して来るようになった。

高谷　では東南アジアの香料は外人が採りに来て，持ち出していたということか。

古川　そういう意味ではマダガスカルには外人の来訪が少なかった。

酒と発酵食品

加藤　食糧の観点からはどうか。

高谷　二つのものを取り上げると差がはっきりする。酒と発酵食品だ。酒についていうと，マダガスカルでは穀物からは酒は造らない。マダガスカルでは rafia ヤシやココヤシ，蜂蜜，砂糖キビから酒を造る。一方，東南アジアにはコメの酒がある。東南アジアには穀物酒とヤシから造る酒の両方がある。但し Nusa Tenggara や Maluku にはココヤシの酒しかない。この意味ではマダガスカルは東インドネシアに似ている。

古川　Betsimisaraka にはバナナ酒がある。

高谷　確かに Toamasina の近くにはバナナ酒がある。しかし，あれは例外と考えておきたい。

加藤　ジャワやバリが穀物酒を持ち，Nusa Tenggara がヤシ酒だけしかないとなると，サバンナマレーは二分しなければならない。

高谷　第二の発酵食品について見ると，マダガスカルにはこれを欠いている。一方東南アジアには多くの発酵食品がある。ナレズシ，テンペ，魚醤，等々。

田中　ナレズシはあるのか。

古川　ある。食ったことはないが，あることは確かだ。

高谷　その他に，発酵ドリアンなどもある。

古川　発酵ドリアンはまずそうだ。どうして食うのか。

高谷　飯のオカズとして食う。スマトラなどでは皆大変好む。深澤さん，マダガスカルには発酵食品は全く無いか。

深澤　タマリンドの半ば発酵したものが市場に売られているが，あれは，わざわざ発酵させたものではない。マダガスカルには発酵食品はない。

高谷　発酵食品も穀物酒と同じで Nusa Tenggara にはない。こうして見てみると，ジャワと Nusa Tenggara の差ははっきりしている。前者にあって後者にないものは数え上げると他にもある。稲だけに関連したものでも次のものがある。オコワ（蒸した米），topeng（籾のまま煎って，その後搗いて脱穀したもの），tape（ツブ酒）がない。それから ani ani もないし，稲魂信仰がない。これらの Nusa Tenggara の脱落現象はマダガスカルに全く同じことが認められる。

古川　topeng はマダガスカルにはある。lango がそれだ。この煎ってから脱穀するというものはコメだけというよりも，ムギや雑穀に結びついたものだ。

高谷　その通り。lango のことは別にすると，マダガスカルは東インドネシアに対比されることになる。ここは脱落要素のきわめて多い，いわば不完全な稲作圏ということになる。

その他の食品

加藤　コメ以外ではどうか。イモはどうか。

深澤　稲作以前を考えた場合，マダガスカル全体ではヤムイモとタロイモの栽培が普及していたと考えられるが，タロイモについては嗜好の差があり，Ⅱの中央高地の人々が特にこれを好む。

古川　あそこには via が多く生えている。いまでも救荒食となっている。昔は利用していたのかも知れない。

高谷　マダガスカル全体で見ると，いろいろのイモが食われている。tali, tabolu, oby, sosya 等々ある。tabolu などは毒抜きの必要があるが，sosya など料理もしないで生食も可能だ。いろいろあるが，難しい。アフリカの yam belt や東南アジアのイモ類との関係はわからない。

古川　東南アジアとの関係でいうと，大きく違う点はやはり，マダガスカルでは abobo を作るという点だ。これはアフリカにはずっとあるが，東南アジアには無い。

加藤　東南アジアでも Minangkabau にはヨーグルトがある。

高谷　Minangkabau には確かにある。しかし，例外的なものだ。東南アジアも7-8世紀という時点をとれば，各地に各種の乳製品があった。インドの影響があったのだ。しかし，こういう乳製品利用は今ではもう，ほぼ完全に消えてしまった。

加藤　結局，マダガスカルには澱粉系の発酵食品は全くないが，乳酸発酵をしたものはあるということか。

高谷　澱粉でもしあるとすれば，ムフガシだ。あれはタミールやスリランカのイドリと同じでほんの少し発酵しているのではないか。

加藤　結局，マダガスカルは澱粉系の発酵食品がないという意味ではサバンナマレーの東半分に似ており，乳製品利用という意味ではアフリカの系列に入るということか。

生活具

加藤　生活具ではどうか。

高谷　人々が竹筒で水を運んでいるのを見てびっくりした。東南アジアと同じだ。

深澤　竹筒で水を運ぶのはⅠの地区だけだ。Ⅲの地区ではヒョウタンが用いられる。Merina などⅡの地区では水壺が用いられる。

高谷　それは大変面白い。偶然かもしれないが東南アジアとの対比が可能だ。東南アジアでは大部分の所では竹筒で水を運ぶ。しかし，ジャワとマドラでは水壺を用いる。中部ジャワではインドとそっくりに水壺を腰に横抱きにするが，東ジャワやマドラでは頭の上に乗せて運ぶ。

加藤　Minangkabau ではヒョウタンを用いる。

高谷　ヒョウタンを用いる所もある。しかし，竹が多い。ヒョウタンの多いのは，むしろ，ニューギニアだ。

深澤　水運び用の壺と水を保存しておく壺は同じものなのか。Merina では同じ物で同じ名前か。

高谷　わからない。ジャワの場合，運搬用の壺は keranting といっているが，保存用がどんなものか知らない。スマトラでは，運搬には竹筒を用い，保存用にだけ壺を用いるところがある。そこでは，その壺を guci といっている。いずれにしても，ジャワやマドラと Merina が似ているのが面白い。

家

加藤　家はどうなっているのか。

高谷　私のフィールドノートの図をそのまま示してみよう。少なくとも2種類ある。

古川　左の木のものは，この図ではわかり

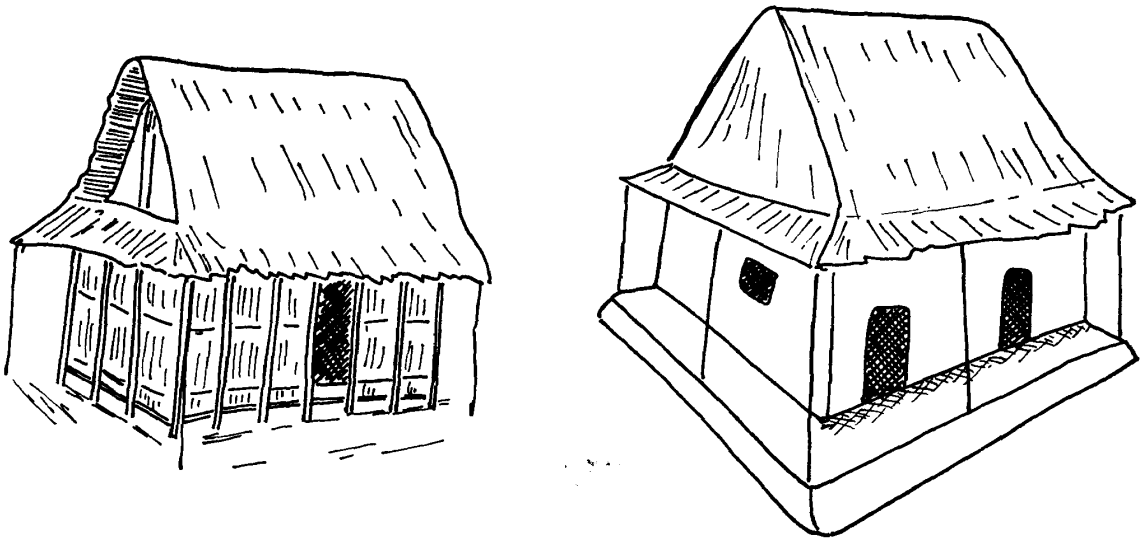


図12　二種類の家。木の柱を多用した高床の家（左）と土台の上に造られた土壁の平家（右）。

にくいが，低い高床構造だ。ときに脚は直立した柱でなく，何本もの丸太を井桁に組み合わせて，床を上げている場合もある。

深澤　これは自分の所のものと少し違う。屋根が少し入母屋型になっているし，それがぐっと壁の外に張り出して，いわば庇が出来ている。

高谷　私が二つの家を示したのは，あんまり難しいことをいうつもりで示したのではない。簡単なことで，木造りの高床の家と土造りの土間の家があるということだ。

前田　Sihanaka は土間作りだが，zozoro（パピルスの一種）で出来ている。

古川　はっきりしていることは，東海岸は木造りで高床ということだ。平土間のものにはいろいろのバラエティーがある。

高谷　私の印象では，東海岸は高床，中央高地は平土間構造で，大きくて，しっかりした家，それから，西の乾燥平原では，平土間だが，zozoro など用いた，いかにも粗末な家が多い，という感じだ。

深澤　東海岸の家も，西のものと同じくらい小さい。それから，Merina の家は昔は木造りだ。

古川　今残っている Merina の王様の家は土間で木の壁造りだ。しかし，木造りの家は王様だけで一般の人々は土塀家だったのではないか。

高谷　平土間に zozoro 壁の家はあまり東南アジアに類似品を見ない。その点，Merina, Betsileo はバリ，ロンボクの家に似ているなという気がした。

古川　Merina と Betsileo では違う。Betsileo は家の基礎全体が盛り上げてあるが，Merina は，外から見ると盛り上げたようにみえているが，実際には，内はまたくぼんでいて，一種の土塁構造だ。

高谷　その通りで，その意味では Betsileo はバリに似ていて，Merina はロンボクの Sasak に似ている。

米　倉

加藤　米倉はどうか。

田中　Betsimisaraka や Antaimoro などの東海岸は高倉構造だ。

古川　東海岸には東南アジアと全く同じよ

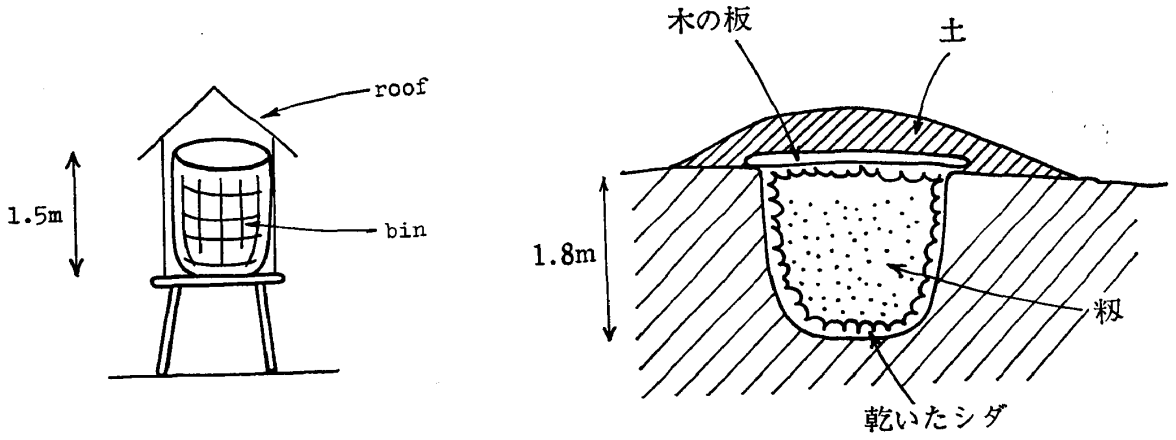


図13　二種の籾貯蔵法。左は zozoro または竹で作った bin，右は pit。

うなネズミ返しのついた高倉が多い。

高谷　私達が得た Bezanozano の情報では，Bezanozano には3種の米保存法がある。第一は家の天井に置く方法，第二は zozoro 製，または竹製の bin，そして，第三は地下 pit だ。pit の深さは 1.5～2.0 m ある。まわりに乾かしたシダなどいれて，上は板で蓋をし，土がかぶせてある。

田中　bin は東南アジアにもある。しかし，牛糞を塗っていない。

高谷　bin の分布はきわめて広い。アフリカからインド，スリランカ等々ある。これはどちらかというと，東南アジアより西のものではないか。

古川　pit も乾燥地のものだ。これは極めて早い時期に北まわりで日本にまで入っている。縄文期にすでにある。インドには入っているが，東南アジアには全く無いのではないか。

加藤　東南アジア型の高倉は東海岸に卓越し，それ以外のところでは，どちらかというとアフリカや中近東に起源の求められる bin や pit が見られる傾向がある，ということか。

農耕儀礼はどうか。

農耕儀礼

前田　Sihanaka では収穫した穂を家の東北隅に，先祖の稲としていつまでも吊っておく。しかし，特に稲霊を認めているというわけではない。ちょうど toaka を飲むときに，少し土地の上にこぼして祖先のためにとつぶやくように，初穂を祖先に捧げるということであろう。

耕起前に水口で催される joro，雨乞いあるいは雨止めの joro などがあるが，大方は，神，先祖，地霊に対して祈りがなされる。

高谷　Anosibe で聞いた話は，焼畑地を決める時には夢占いをする。よい夢を見ると，その場所を開いてよいが，悪い夢だとそこの使用は諦める。東南アジアでも同じようなことを行う。アフリカでも同じようなことをやるのか。

古川　実際伐開する前にもう一つやることがある。それは Vazimba を騙すことをやる。素裸になって森に行き，焼いた籾を播き，バナナを植えて来る。バナナは上下逆さまに植える。すると，Vazimba はこれを見ていて，「アア！　何という馬鹿な連中だ。こんな連中の居る所には居られない」と言って，他所へ行ってしまう。するとそこで伐開，火入れする。もっとも，その時に，もう一つ joro をやる。バナナの葉を敷いて，その

上に蜂蜜，御飯，ラム酒，タバコを供える。これは先祖に供える。

深澤　人々は土地の霊に供犠をする事は必要と考えている。

マダガスカルでは，新しく村を開く時及び新しく森を伐採し畑や水田を拓く際には，その土地の霊との間で関係を結ぶための供犠が必要とされている。更に，このような形で土地の霊と関係を確立した先住の人々は集合的に「土地の主」のカテゴリーを形成し，土地に於ける豊穣の祭祀という点では，後からやってきた人々に対して，たとえ政治的な力関係で劣位におかれたとしても，優位に立ち，その祭祀権を保持することになる。Merina 族の場合でも，Vazimba 族は Imerina 地方の先住の「土地の主」であり，政治的には Vazimba 族を Merina 族は駆逐，吸収してしまったものの，Merina 王族の系譜に於ける Vazimba 祖先伝承，現在でも各地で見られる Ranoro をはじめとする Vazimba 祭祀として，Vazimba の土地の主としての霊的優位が示されている。また Merina 族地方をはじめ，Vazimba が最初に稲作を知っていたとの伝承も存在する。それから，Vazimba から稲をもらったという話は広く存在している。

古川　Vazimba から稲をもらったのは Betsileo で，Merina がもらったのは焼いた籾だったという話を聞いたことがある。

前田　儀礼はあることはあるが，東南アジアと比較して，マダガスカルで強く感ずることは，農耕儀礼の貧弱なことだ。とりわけ，稲魂の欠如ははっきりとしている。

高谷　稲魂の欠如という点では東インドネシアと共通している。もっとも東インドネシアは農耕儀礼そのものは極めて多く強い。ただそれが，古川さんの指摘するように，根栽農耕の儀礼の様相を強く帯びて来る。

III　総　　括

加藤　そろそろ，まとめに入りたい。マダガスカルには東海岸，中央高地，西の乾燥地というのがあって，それぞれに違った性質があることがわかったが，マレー世界という枠組みのなかではどう位置づけたらよいのか。

Merina について

高谷　少し待って欲しい。模式的にとらえると，東海岸の焼畑卓越，西の乾燥平原の牧畜卓越というのはよくわかる。しかし，中央高地のイメージがもうひとつハッキリしていない。Merina のことをもう一度考えてみないか。私の Merina のイメージは次のようなものだ。検討してほしい。

Merina の特徴としていえることは，

1. 確立した短期休閑畑
   - angady による深耕
   - 厩肥利用，penning
   - 混作
2. 移植水稲
3. 牛肉の多食，魚食わない。
4. 生野菜食わない。
5. soanjo (taro) に対する好み

といったところだ。

前田　食物に対する嗜好等は，すぐ変わってしまうものだ。だから 3, 4, 5, はあまり重要視してはならない。むしろ，1, 2, を重視すべきだ。

深澤　Merina が soanjo を大変好むということは有名なことだ。これはよい。だけど，魚を食わない，というのは間違いだ。よく食う。それから，生野菜を食わないというのは，何も Merina の特徴ではない。マダガスカル中，どこでも生野菜は食わない。

古川　Rakotomalala 氏が我々に話してくれたところによると，やっぱり魚はあまり

食っていない。彼らは肉をより好んでいる。同氏の情報によると，牛肉は毎日食う。魚は，キリスト教の影響で，肉の食えない金曜日にのみ食う。ニワトリはお客があった時に食う。七面鳥はクリスマスに食う，となっている。

深澤　でもMerinaでは水田の中に養魚池など作っていて，川魚を食うようにしているのではないか。

古川　田の中に養魚池を作るというのは，最近になって政府の奨励で始めたものだ。もっともむかしから，田や川の小魚などを食うことは食っていたが，ごく少なかったらしい。

高谷　魚よりも肉を好み，生野菜を食わない，と言ったのは，もしそうだとすると，これは今のジャワによく似ているナ，と思ったからだ。多雨林マレーはこれとは全く違う。生野菜に多くを頼り，川魚を好んで食べる。Merinaは多雨林マレーとは全く違い，むしろジャワに似ている，といいたかったのだ。

深澤　Merinaがそんなに肉を食う，というのは町の話で，田舎では肉など食わない。

古川　ジャワでも同じ。田舎のジャワ人は肉など殆ど食わない。やっぱりよく似ている。

田中　確立した短期休閑畑といっているが，何を作っていたのか。

高谷　そこがわからない。一番困っているところだ。

深澤　つい最近まではソルガムが，マダガスカルのほぼ全域にかなり広く分布していた。

高谷　とすると，ソルガム，タロ，豆，それにごく少しオカボといったところか。

深澤　もしMerinaがジャワから来た，とすれば，マダガスカルにイスラムやヒンドゥが入っていないのはどう説明するのか。

前田　イスラムは時代的に問題にならない。ヒンドゥもジャワ圏全体を覆ったわけではない。それはそうと，立派な移植水稲というのは，その頃のジャワ周辺にあるのだろうか。

高谷　10世紀頃にはあるのではないか。少なくとも，ジャワの寺院荘園ではやっていた可能性がある。

全体像

加藤　それではMerinaは一応，イメージとしてはジャワに近いということで，いよいよ総括に入りましょう。

今までのことをまとめると，大体図に示したようなことになる。Iとした東海岸は熱帯多雨林地帯で焼畑稲作が中心的な生業である。谷間には湿地稲作があり，蹄耕がある。これに対して，西の乾燥平原はパストラルな空間であり，そこには，灌漑畑があって，ここでも蹄耕が行われている。これは極めてアフリカ的な文化要素の強い所だ。このアフリカ系のパストラリストなるものは，古くは中央高地を覆っていた。ところで，中央高地には十数世紀の頃からMerinaの出現があって，これは，一見ジャワ的な空間を作った。中間帯はあるが，一応標準型としては三つを考えてみよう。

古川　蹄耕をマレー的要素と考えるのは具合いが悪い。以前はそう思っていたが，Baraのあの300頭の蹄耕を見て，意見を変えた。あれはむしろ，メソポタミア起源と考えるべきだ。

田中　蹄耕はやはりマレー的要素だ。少なくとも東の要素だ。メソポタミアにあったとしても，B.C. 3000年紀では古すぎる。マダガスカルの考古学がA.D. 9世紀から始まる，というのとは時代ギャップがありすぎる。先にも言ったように，スリランカか東南アジアでプールされていたものが，ずっと後世になって，こちらに伝わってきたのだ。

古川　メソポタミアに始まる大きな一本の穀類文化の系列と，熱帯多雨林にある根栽文化の系列とを，はっきりと分けて認識してお

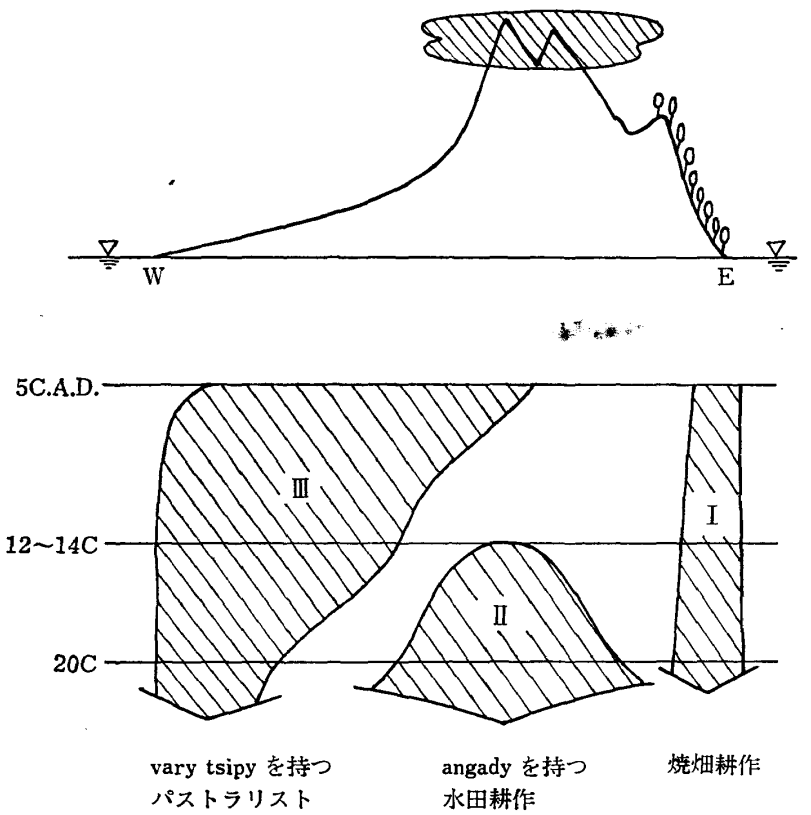


図14　マダガスカルの3地区の生態史モデル

く必要がある。私の言いたいのは蹄耕は熱帯多雨林の根栽文化の技術ではなく，乾燥地の穀類文化の技術だということだ。

田中　それはわからないことはないが，このタイム・ギャップと，アフリカ大陸を縦断する空間的なギャップが埋まらない限り，蹄耕はマレー系技術としてとらえておいた方がよい。

加藤　蹄耕の起源に関して重点の置き所に，いささかの意見の分かれがあるが，Ⅰの東海岸は焼畑と湿地稲作の場と考え，これは海マレーの土地利用に共通している，と考えてよいか。

皆　よい。

加藤　Ⅲの乾燥平原は圧倒的に牧畜が重要であり，これはアフリカ系要素が強い，としているが，これでよいか。

高谷　もうひとつ，傾斜灌漑畑のことを付け加えておきたい。いささかの問題が残されていないわけではないが，これも Nilote 的要素と考えておきたい。

古川　傾斜している畑に，上から水を流し，それを牛に踏ませて地拵えし，散播して，また踏ませる，というのは，はっきりと Nilote のものだ。これは東南アジアで見る湿田の蹄耕稲作とは全く異質だ。

加藤　作っているのは雑穀か。

古川　かつてはアフリカ系の雑穀を作っていたのだろう。今は稲だ。もっとも，このⅢは基本は牧畜だ。

加藤　そうした東と西の二つの世界の間にⅡのジャワ的世界が，後世になって出現した。

高谷　基本的にはそれでよい。ただ，ジャワ的という言葉の理解には注意しておいたほうがよい。今のジャワの先祖が渡航した，と

いう意味ではない。そもそも，ジャワというのは極めて特殊な集団だ。もともとはサバンナマレーの一メンバーだが，そこに，いろいろの外来文化が重層して今日のジャワを作り上げている。今日のジャワは，ヒンドゥやイスラムやオランダの文化を吸収したサバンナマレーだ。Merina にもそういうものを極めて強く感ずる。アフリカを経由して到来した文化や，アラビヤ，ヨーロッパの文化が元のものに重層している。そして，元のものといえば，私の目にはサバンナマレーだ。ジャワ的というのは，このように，他文化の重層を受け，ある種の特殊発展をしたサバンナマレーということだ。

加藤　マダガスカルは類型的に見ると，西からアフリカ系の地区，中央のサバンナマレー的地区，そして，東の海マレー的地区になるということである。その間に，いくつかの中間帯が存在している。

将来の問題点

高谷　マダガスカルの総括は今の加藤さんのまとめで全く異論ない。ただ，ここで，マダガスカル調査を終えて，新たな問題として浮かび上がって来たことを付け加えさせてほしい。それは赤道高地の問題だ。

きわめて高度に進化した Merina 農業をジャワとの関係において論じたが，赤道高地には Merina 以外にも，汎世界的な規模で高度な農耕社会が作られている。それは，われわれの常識を越えた程の高度な発展を，極めて古い時代から見せている。例えばインカなどのあったアンデス山地，紀元前から灌漑農業を発達させているニューギニア高地，それと島嶼部東南アジアの高冷地の諸集団，それにアフリカにはエチオピアがある。

これらの古くから現れる高度な農業社会が，赤道高地という特殊な生態環境に適応して平行的に進化したものなのか。それとも文化伝播があったのかは大きな問題だ。それぞれの農耕技術は，その内容を見てみると驚くほどの類似性を持っている。

もし，平行進化なら，人間の環境適応の類似性ということで極めて興味ある問題だ。もし，文化伝播ということになるなら，極めて古い時代に circum-equator 規模の情報伝達を考えねばならない。

マレー世界を研究する私達にとって，問題はもはやマレーという地球の一局所だけでは納まらなくなっていることを認識しておきたい。